

い。

現實の問題より遊離して、單なる論理の遊戯と化した清談は、談論そのものの中に存在の理由を求められねばならなかつた。此に王衍の後輩歐陽建の言盡意論が出づ可き理由があつた。之は要するに言語そのものの中に眞理があるのであつて、言より離れて存する眞理を言が云ひ表はすのではないと云ふにあるらしい。談論の粹なる清談は、談議そのものが眞理の追求であつて、勝者の論が其儘に眞理なのである。下つて東晋の中期、許詢は王脩と理を談じて之を屈服せしめ、次に立場を換へて、先の王脩の主張を取りて自らの主張として又王脩を屈服

ツクユディデスの古代史に就いて

一

ツクユディデスの「歴史」八卷は、いふまでもなく、ペロポネソス戦役の歴史を書いたものである。

ツクユディデスの古代史に就いて

せしめた。支道林が之を評して「眞に理の當るを求めるとでなく單なるこぢつけに過ぎぬ」と非難したが、論理そのものゝ討議はこの邊まで來ると、勢ひ佛教の議論を參酌せねばならなくなる。否、清談の發展はその當初より佛教思想の影響を蒙つてゐると見られる節があるのであるが、今は論の多岐に亘るを處れて暫く説き及ばぬこととする。

〔参考文献〕

市村瓊次郎博士。

青木正見博士。

板野長八學士。

清談源流考(支那史研究)

清談(山岩波講座東洋思潮)

清談の一解釋(史學雜誌第五十編第三號)

原 隨 園

ところでその第一卷の一章から二十三章までは、ペロポネソス戦役にいたるまでのギリシア古代史が取扱はれてゐる。その部分は通常 Archaeologia(古代史)と呼ば

れてゐる。ペロポネソス戦役の歴史を書かんとしたツクムディデスが、どういふつもりで此の古代篇を書いたのであらうか。それは單にペロポネソス戦役を記述するための序説として、極く軽い意味で附記したものであるのか。或はエデュアルド・マイヤアがいふやうに、「古代の戦が小規模のものであつたといふことを示すため」(Eduard Meyer, Forschungen zur alten Geschichte I. S. 122 A. 1.)

といふやうな案外軽い意味しかもたないものであるのか。それとも彼の歴史の全體の構造の上に、緊密な意味をもつた、相當重大な意義をおくべきものであるのか。

これらの點について若干考察してみようと思ふ。

一

元來此の古代史の部分は次のやうに區分される、

- 一、序 説 (一章、二〇章—二三章)
- 二、トロイア戦争史(二章—十一章)
- 三、トロイア戦役以後の歴史(一二章—一九章)

四、結 論 (二〇章—二三章)

人は序説の構造が二分されてゐるのに注目されるであらうと思ふ。

二〇章から二三章までの序説は、彼の歴史記述の立場について述べたものであつて、例へば自分が戦争に直接關係したとか、引用した演説は必ずしも言葉とほりでなくその人がその場にて述べるにふさはしいと考へられるやうに書いたとか、或は詩人や地誌記述家のやうに興味本位で書いたのではないといふ類の態度表明である。そして二三章はペルシア戦役との比較よりして、ペロポネソス戦役の序説となつてゐる。

ツクムディデスの書物が、一時に纏まつて記述されたものであるか否かについては論議が重ねられてゐる。

少くとも第八卷には直接の形でといふ演説がみえてゐないので、また修正の手を経ざる未完成の部分と考ふべきであらう。(クリストはこの點は文體を變へたためであらうと推定してゐるが、第八卷だけ文體を變へるといふことの必然性はなし) (Christ, Griechische Literatur

(Geschichte I. S. 482) また第五卷についても未完成の部分のあることが指摘されてゐる (Wilmowitz, Le-sehrichte 79, Hermes ss. 308-9 1902)。またペイシストラトスの逸話は、第一卷二〇章、第五卷五章以下などにおいて重複してゐる。これらの點から考へて、彼の作品が完成品としてではなく、修正の途上にあつたことが思はれるのである。

更に第三卷の一七章や八四章の如きは、後人の修補と目さるゝ點がある (Classen-Stemp)。

此のやうに考へてくると、第五卷二六章に

「同じツクユディデスは、夏と冬とで事件を次第してアテナイの没落まで書いた」とか、或は第六卷第七卷のシケリア遠征の記事の如き、比較的渾然と纏まつてゐる部分の存することと思ひあはせて、ツクユディデス自身の執筆が、幾つかの部分に分れて着手され、それがアテナイの没落する前後から、統一と修正とに進んだものと思はれるのである。従つて、序説の部分の卷頭と二〇—二三章あたりにあらはれ來るといふことも、かゝる修正の

ツクユディデスの古代史に就いて

行はれたことを裏書する一例といつてよい。

だから卷頭に書いて

「アテナイ人ツクユディデスは、ペロポネソス人とアテナイ人とが、お互に戦つた戦を書いた。彼は戦がはじまつた後に直ちに着手した。且つ戦が大きく、會つてあつたものよりも、一層著しいものであることを豫想した」(C. I. S. I)

とのべてゐるが、それは事件が相当大事件として進行したことを知つてゐるのだから、その言葉どほりには受取りえないのであつて、修正、統一に着手した後の序説とみるべきである。

また、

「双方ともに、あらゆる準備について、絶頂にあるときに戦に入つたことを認めた」(C. I. S. I)

とか、或は

「他のギリシアは双方の何れにか組した、或者は即刻或者はその心積りでめた」(C. I. S. I)

とか、いつてゐることは、開戦直後の状態として、その

まゝ受取ることが出来るとしても、

「實際この運動は、ギリシア及び夷狄の一部において
は、若し言ふべくんば人類の最大部分について、最大
のものとなつた」(C. I § 2)

といつてゐることは、少くとも戦争の経過がかゝる様相
を呈してきた以後において、考へられ記述されうるところ
である。従つて修正統一を考へてから書かれた、その
ための全卷の序説として眺めてみて、はじめて了得しう
るところである。

さてツクエディデスがかゝる態度を以てペロポネソ
ス戦役史を執筆したとすると、

「之に先だつものは固より、一層古きものを詳細に知
ることは、永い年月のために不可能であるが、自分が
可及的廣き研究によつて信するに足ると思はれる證據
により(或は自分が信頼を與へる可及的廣き觀察によ
つてした證據により)、自分は、戦争についても、そ
の他の關係においても、それは從來の戦争は大きな
かつたと考へる」(C. I § 2)

といふ序説は、ペロポネソス戦役の前史として、これ
が未曾有の大戦争であることを證明するために古代史を
記述したのであると、マイヤアのやうに簡単に考へ去る
ことも出来るのである。

けれども第二三章には、從來の戦役の最大なものとし
てペルシア戦役を挙げ、それとペロポネソス戦役とを
比較して、後者が遙かに永く且つ複雑なことを説いてゐ
るから、單に空前の大戦争であつたことを云ふ序説とし
て書いたものならば、ここから執筆をはじめても好いわ
けである。それにも關らず、二一九章までの古代史を
記述したことは、單に附隨的に説いたものとも思はれな
い。

また二一九章の記述は、それだけで渾然とした一體
をなしてゐるのみならず、二〇章には傳説や風説の性格
を論じ、二一章には詩人や地誌作家の態度を非難し、二
二章には史料としての演説の性格を考へてゐる。かゝる
方法的な部分と二二章二節の方法的序説とは如何なる
關係をもつてゐるかを考へてみれば、そこには單なる序

説以上の意味があるやうに思はれる。少くとも、二三章に總括してあるペルシア戦役が過去における最大の戦争であり、それに比してもペロポネソス戦役が遙かに大きい戦争であつたのだといふ、いはゞ眞の意味の序説に代へられた特殊な意味をもつてゐると考へられねばならない。

二二

文獻學者は、ここにおいて第一章二節の、「之に先だつもの」*pro action* といふ言葉は、直ちにペロポネソス戦役をさして之に先だつといつたのだといふ意味には考へられないといひ、「此の運動は最大のもの」*kinesis haute de misiste* であつたといふのは、ペロポネソス戦役以外のものを指すと考へようとする。

そして第一節に「今迄に起つたもの」*Progeschwemmen* としてツクエディデスが讀者に豫想せしむるものはトロイア戦争乃至ペルシア戦役であるとなし、第一節と第二節との間には何等かの欠如があり、それがトロイア戦争

又はペルシア戦役を説いたのであつて、従つて、「此の運動」とか「之に先だつ」とされる對象はトロイア戦争 (*Schwanke*) 乃至はペルシア戦役 (*Pohlens*) であると説明するのである。

かゝる研究は暫らく文獻學者に委せておかう。吾々をして言はしむれば、此の場合にはかゝる詮議だてをすることは、餘りにも言葉の使用が常に完全であることを強要するに近いものであるといふべきである。虚心に本文に臨むならば、ツクエディデスの言はんとするところは極めて明瞭であつて、文獻學者の態度は、むしろ平地に好んで波瀾を企てるものとさへ考へられる。

吾々にとつて重要なことは、かゝる序説が二一九章の渾然たる部分をさしはさんで、一章と二〇―二三章との間に何故説かれてゐるかといふことであり、従つてまた何故にかゝる古代史を記述したかといふ大局に關しての問題である。此の古代史の部分が全體の構造の上に、又作者の態度の上に、如何なる意義をもつてゐるかといふことである。換言すれば、最も重大なことは、此の古

代史が單純な序説として、全體の上に存在してもしなくとも大した重きをもたないものであるのか、それとも、此の部分の存在が、全篇の上に欠くべからざる意義をもつてゐるかどうかといふ點である。

自分の考へるところでは、彼のペロポネソス戦役史を記述する際におけるツクニディデスの細心なる注意は第一章二節、二〇—二三章の間に説くところで明瞭である。しかし、記述の方法、研究の態度といふ方法論より、一體歴史とはどんなものであるかといふ性格を明確にし、ペロポネソス戦役といふものも、畢竟、ギリシア民族の歴史的な展開の上にあるものとして把握せんとしたことが、此の古代史のもつ重要な意味の一つであり更に歴史的な展開は何を契機として動くかといふことを「古代史」において闡明したことが、重要な意味の二つであると思はれる。

従つて此の古代史の存することは、單なる附録的副次的なものとしてあるのではなく、實に之あることによつて彼のペロポネソス戦役史が、より完璧になつたので

あると信ずる。従つて第一章と第二〇章以下との間に挿入された古代史は、廣い意味においてツクニディデスの方法論であり、研究の態度と方法との記述の間に挿入されたのではないか。かくて彼の方法論が完成されたのではないか。之が今考究せんとする眼目なのである。

四

第二一一章までは、トロイア戦争及びそれ以前のギリシア民族の情勢を記述してゐる。

第二章は民族移動について論述し

「現今ヘラスと呼ばれてゐるところは、昔ははつきりと定住されて居なかつた」

と冒頭に言つてゐる。此の短い句の間にも、強ひて言へば、現在から古代を眺める態度、古代史を現代との關聯から眺めんとする態度が看取されるとも言ひうるであらう。

しかし吾々は強辯に近い論考を費す必要はない。ツクニディデス自身が、極めて簡潔にしかも含蓄ある考察を

堂々と進めてゆくからである。

即ち民族移動の原因は、人口の少い種族が人口の多い種族に壓迫されて起るのであつて、しかもかく易々として手輕に移住の行はれたところに、古代の姿を觀た。そこでその事情を一層深く掘り下げて考察したのである。

海陸における交通不安と従つて交易の不十分であつたといふ外的事情、また彼等が自給的なその日暮しの生活を營み蓄積を行はず且つ土地の耕作も行はないといふ自然經濟的實情、更に防壁を設けず、外種族の侵入も容易であつたといふ内部的事情(215)を説いてゐる。

ここに古代人には定着することへの意欲も薄く、且つ隨所に需要を充冠しうるといふ事情もあり、之と相伴つて定着するための防備もないといふ實情とを取りあげてゐることは、極めて簡單でありながら、遊動的生活から定着生活の初期における自然經濟の面目を説き盡くして餘蘊がないといつてよい。そして彼等古代人が躊躇なく移住した實相と、未だ都市生活に到らざる微弱なる生活の姿とを結論的に言及してゐるのである。

しかもそれは抽象的觀念的な記述ではなく、これを事實について次に論證を試みてゐるのである。即ちギリシア各地の豐沃な地域において移住の頻發したことをあげてゐる(216)。

けれどもかゝる外的事情だけの説明に終始するならばそれは單なる經濟論、若しくは經濟史ともみられやう。ツクニデイデスはそれを歴史的なものと觀ようとするのであつた。そこに歴史家としての偉大さがある。即ち土地が豐沃なといふ條件から、一方では種族の内部に貧富の差を生じ、内訌を發生し、遂に没落にいたるといふ、種族自體からの興亡を論じ、又豐沃であるといふために外部からの侵犯を被り、民族の隆替することを論じてゐる(217)。此の短い論説のうちに、よく複雑な歴史事情を道破してゐるのである。

ツクニデイデスはなほ之等の論述を以て満足せず、反對に不毛の土地においては内外の諸事情が豐沃な地域と表裏をなし、従つて種族は移住することなく比較的永く定住することを論じた(218)。その實例としてア

ツチケをあげ (C. 386), それが次第に人口の膨脹を來し、遂にイオニアへ植民することになつて及んでゐる (Mid)。史實に徴しつゝ、一步一步堅實に論理を運んでゆくのである。

此の最後の節において、アツチケにおける人口膨脹の一理由として、他の種族内における内訌のために亡命し來り、アツチケの市民となつたもののあることをあげてゐる。ここに經濟的社會的考察が、やがて政治的なるものをも含み來る伏線があるといつてよい。

五

第三章の内容をみると、ギリシア民族の政治的に無統一であり微力であつたことが書かれてくる。そしてトロイア戦争以前には、ギリシア人が民族として共同した戦争がなく、従つて各種族が政治的軍事的に微力であつたことを論ずるのである (C. 387)。

その論據としてはギリシア人といふ共通の名をさへ持たなかつたといふことをあげ、彼等が共通の名をもつに

到つたことは、デウカリオン Deukalion の子ヘレン Helen の子孫が、軍事的有力者となり、諸種族との間の交通も行はれるにいたつて共通の民族名をもつにいたつたと考察する (C. 382)。

ツクムディデスがギリシア民族が微力であつたといふ論據としてヘレネスといふ共通の稱呼をさへもたず、民族として統一してゐなかつたといふ推定をなし、その證據としてホメロスの詩をもち出して來るのである (C. 383)。

ツクムディデスの論證は、常に消極的と積極面とをもつてゐる。ホメロスにギリシア人といふ共通の稱呼をもたなかつたといふ論證と併行して、蠻夷 (Barbaroi) といふ言葉がなく、従つて後世のやうにギリシア人に對する蠻夷といふ考へ方のなかつたといふことも述べるのである (C. 383)。

此の點は方法論としては傾聽すべきである。けれども文學的研究が進んだ結果は、後者の論證には異議がはさまれて來た。それは「他の言葉を話す者」allothroi と

いふ言葉が、オデュッセイアにみえ、イリアスの新らしい部分 II. 867 には「鵲舌の人」 barbarophonoi といふ言葉さへみられるからである。即ち言葉の差違によつて異邦人をギリシア人から區別したことが、案外古くにあつたことを思はしめるから、ツクユディデスの此の論證には、若干の異議がないわけではない。

けれども論證の方法としては、決してその價値を薄めるものではない。

又ホメロスの如き詩人の歌ふところが、歴史としてはとりあげ難い傳承であることを、十分に自覺してゐる (C. 21 § 1)。それにも拘らず、ホメロスを論證の基礎に利用してゐることは、ホメロスの利用すべき部分と利用すべからざる部分とをよく理解してゐるのであつた。

海賊を昔は決して非難しなかつたといふ例證をオデュッセイア (III. 71, IV. 252) に求めてゐる如きも (C. 5 § 2) その一例とすべきである。或はアガメムノンの勢力が島々に及んだこと (II. II. 610f.)、或は「雷める」コリントスといふ用例 (II. II. 570) を活用してゐる。即ち現在

の文獻學的方法の骨髄を理解してゐたといふことが出来る。

詩に潤色があるとしても、而もその中に動かし難き歴史事實を含むものとして、取り上ぐべきは取り、捨つべきは捨てるといふことが實に明確にされてゐるのであつて、ツクユディデスの非凡なる歴史的天才を認めることが出来るのである。

古代ギリシヤ人がかくの如く微力であつたといふことは、第二章の社會經濟史的な微弱な生活の實情と呼應せしめてゐるのであつて、相互交通の欠如といふことを以て總括してゐるのがそれである (C. 3 § 4)。従つてギリシヤ民族の強力化してゆく重要な過程として、交通の開けたことがあげられ、それが經濟生活にも貿易の振興となり、政治生活、軍事方面においても、勢力の結集と緊密な民族感とを加へ來るといふことが自ら讀者に連想せしめられるのである。即ち政治的合従、政治的強力が、交易の接觸、經濟力の進展と相伴ふとする史觀が顯著にあらはれてゐるのである。ギリシヤ民族を強化したその交通

の發展は、就中、海上發展にあるといつて (C. 385) 以て次の章を喚起し來るのである。

六

第四章にはミノス Minos 王の海上支配 Thalasso-Kratie が説かれてゐる。即ち海軍を興してギリシアの海の大部分を支配し、クキュラデス群島を支配するとともに之に植民し、カリア人を驅逐して、その地に自分の子供達を分封し、更に海賊を掃討して、その收入の確保を計つたといふのである。

此の短い簡単な記載のうちに、極めて重要な内容が盛り込まれてゐる。

ギリシア民族の強化といふことが、交通の隆盛に伴ふ經濟發展にあるといふ前節までの論旨が、今や交通といつても就中海上交通にあるといふことを強調してゐるのである。そして海上交通を妨げる海賊の討掃が、先決問題であることは、後にロオマ時代にマリウス Marius の海賊討伐によつてロオマの世界支配が確立したことと對

比されるのである。またギリシア制覇のアテナイが、興隆の基礎を制海權の上に立てたことを思へば、五世記のアテナイ人として、ツクエディデスが海上權を重視したことの意味が明かになると信ずる。

さてミノスの海上制覇は、海賊討伐のみならず、要所々に肉親を封する植民地の經營によつて、確保したことに重點があり、更に之によつて收入の確保を論じてゐる。又半面には、民衆の間に交易の安全になつたことも豫想せしめるのであつた。かくてミノスの政治力と、國民の經濟力の増強とが、共に海上權の確立にありとしたことは、ツクエディデスの歴史把握の力の偉大さを示すものといふべきであらう。

ツクエディデスは、かくの如く彼の歴史觀を茲に明かにするとともに、更に之に對して史實の裏づけを行つてゐる。そこに彼の歴史敘述を堅實ならしめるとともに、周到な用意が覗はれるのである。

海賊の討掃がミノスの海上制覇の根幹であるといつても、海賊行爲そのものが、當時の意味するものと前代の

意味するところは、本質的に相違するものあることを考へてゐる。そしてかゝる前代の海賊が、實は海上貿易の卒先者であることを説いてゐる。(C. 5 § 1)。

此の點において一つの事實の歴史性、時代によつて意味の異なることを考へてゐるのであつて、海賊といへば、昔から今にいたるまで、無差別に單なる窃盜者と考へるといふやうなことがない。之また吾人の注目し得る點ではなからうか。

またかゝる古い慣習が、彼の當時なほ未開の地域に残存することを説き(C. 5 § 2)、あはせて平時に武裝するといふ慣習に説き及んでゐる(C. 5 § 3)。即ち昔は平時に武裝した慣習も、今は未開人の間にみられるといふのである。この點はツクユディデスが歴史の發展といふことに向つて示した關心の深さを示すものであつて、同じ程度の文化段階には、類似的現象を呈するといふことを信じたからである。人文展開の上に示した勝れた把握を映すべきであらう。

しかもかゝる推論をただ外貌の類似からするのでなく

歴史生活の必然から解釋したのである。かの海賊行爲にしても、たゞ海賊があつたといふのではない。海上貿易が行はれたといふことと、更に「有力者が首領となつて、個人的な利益を計る」といふ點に海賊の發生を考へるのである。即ち、經濟事情の變化と、並びに強者の慾望とから導き出されるのである(C. 5 § 1)。それは、C. 5 § 2にみえるやうな強者の慾望によつて、歴史事象の展開することをも含んでゐるのである。かくてツクユディデスは、歴史をつくる人間の性情にまで、現實を現實として直視して勇敢に解剖して行つたのである。

二章二節にいふやうに、或る種族が侵略を敢てするのにも生活の必然として考へる。だから、海賊行爲も亦生活の必然でなければならぬ。そこで海賊行爲は必ずしも或る時代には、道義的な悪とはみなされなかつたのである(C. 5 § 2)。従つて海上のみならず、陸上において行はれる却掠も亦生活の必然として許容され、人々は自衛のために武裝してゐたと物語るのである(C. 5 § 1)。

る)。

かく海賊の發生や、陸上の却掠の發生を生活の必然とする考は、現代でも、例へば膨脹せんとする國民は領土を擴張する權利があり、それが生存の必然となるときは權利は一轉して義務となるといはれてゐるが、強者の權利をといふソブヒストの思想に胚胎するものである。

かく生活の必然として許された海賊行爲も、ミノスの海上霸權によつて、海賊が討掃されたと論述するツクユディエスにおいては、最早や海賊行爲が正當な生活權とは考へられてゐないこと、従つて道徳的惡となつてゐることを思はしめる。そこに一つの行爲をみるにも、單に道義的な枠をとほして眺めることなく、社會的な環境において理解しようとするツクユディエスの立場がみられるのである。

七

先きのべたやうに經濟生活が原始的であつて、直ちに移住する傾向を伴つてゐたために、無防禦な國家をも

つたといふことは(C. 2. 3. 3)、經濟生活に呼應して、政治生活の未熟さを説明する。偶々定着しても海賊の來襲を惧れて、内陸に都市を構築したと解明してゐる(C. 2. 1. 1. 1)。しかし不安定な國力を以ては防ぎえないとしても、防がなければならぬ現實から武器携帯 *Stelephoria* を解説するのである(C. 6. 1. 1)。ツクユディエスの歴史的洞察の深さは、單に外貌の記述でなくて、常に一層根柢に横はるものに觸れようと努めるところにあり。更にそれを廣く文化段階の把握にまで押し擴げたところに敬服すべきものがある。

第六章は素朴なる未開文化と、開明せる文化とを對比して、文化進展に關する一大理論を示したものと注目される。そして文化國に進んだアテナイと、素朴なる慣習を墨守するラケダイモンとを對比してゐるのであつて、ここには暗々裡に、ペロポネソス戰役を戦つた双方の性格の相違反撥が説かれてゐるとみることが出来る。

さて政治生活と經濟生活との間に、密接な關係を認め

るツクニディデスは、海賊討掃によつて交通の安全が確保され、交通の確保によつて貿易の隆盛が促進され、貿易の繁榮は富強者の出現、都市の強化を顯現したと考へる(C. 833)。かくて強い政治力の結成となり、惹いてはトロイア戦役が起ると説明する(C. 834)。極めて合理的に領解される論述である。

トロイア戦争を起すに當つて、ギリシア方の軍隊の結合をみたのは、ヘレンの求婚者達がヘレンの父ツუნダレウス Tundares に協力を誓つたことに由來するといふのが古來の傳説であつた Apollodoros, Bibliotheca III, 10, 9)。かゝる傳承に對してツクニディデスは飽くまでも人間的現實的な立場をとつた。それは經濟力と政治力との相關を考へる彼としては、むしろ當然なこととも言へる。まことに古代的なものとどめない歴史家であつた。即ちギリシア軍は、その總帥アガムムノン Agamemnon の實力 amanis によつて徵集糾合されたものであつて、單なるツუნダレウスに對する誓約の結果ではないとしたのである(C. 831)。

ツクニディデスの古代史に就いて

そのアガムムノンの實力の基礎をペロップス Pelops の富による半島統一とアトレウス Athens 家がムケナイ Mikenai の主權を併有するにいたつた實情から説明したのである(C. 930)。誓約に對する好意よりも恐怖に由來するといふことは、オデュセイアの解釋(V. 307)を修正したものであるが、ツクニディデス的人間觀念あり、歴史觀でもある。

けれどもアガムムノンの實勢力を解剖して特にそれが優れたる海軍力にありとしたことは(C. 935, 35, 36)ノスが海權を握つて一大躍進をとげたといふ記述(C. 4)と相俟つて、當時のギリシア人が如何に海權を重んじたかを思はしめる。

八

「トロイアに出征したのは、更にその後のことである」(C. 834)

といつてゐるのは、ミノスの隆盛よりも、トロイア遠征時代の方が、遙かに規模の大なることを示さんとしたも

のである。

「此の征討によつて、その以前のことを推定せねばならぬ」(C. 9 § 5)。

といふのも、前述のことを裏かへして説明したものであつて、ミノス時代が隆盛であるといつても、トロイア遠征に比すれば、なほ小規模であり、勢力も微弱であつたと稱するのである。

かくしてペロホンネソス戦役がギリシア民族空前の大戦争であることの伏線をつくつてある。しかしこれとも第十章においてその遠征の人数を、最大最小の船の乗組員から平均数を推定して、可及的具體的に解説したのであつて(52)、單なる想像や獨斷を恣にしたものではない。

此のトロイア戦争が作者の時代からみれば、極めて小規模のものであつたとしても、それは單に人員の少いといふことではないと考へた。即ちそれは畢竟財力の匱少 *achrematia* (C. II § 1) による。財力が匱少であつたために昔は徴力で *asthene* あり、財力が乏しかつたことか

ら、トロイア戦役が作者當時よりみれば、さして大なるものではなかつたといふのである (C. II § 3)。

財力の乏少であつたことは、直接に食糧の不足 *trough-
g'adonia* を來し (C. II § 1)、之によつて全兵力を専ら戦闘にだけ向けることが出来なかつた。即ち一部は食糧補給のために兵力を分散せしめなければならなくなり、之が十年の久しき戦争にいたらしめた主要な事情であつたと考へる (C. II § 1)。

かゝる解明は、ギリシア民族が、その昔盛に移住をしなければならなかつた事情と相關聯するものであつて、ツクエディデスの歴史記述に、首尾一貫した歴史把握の流れれてゐることを見逃しえないのである。

また初期移住の原因として、海陸交通の不安があげられ、ミノスの海上權樹立によつて海賊は驅除せられ、海權の重要性が強調されてきたことは既に説いたところである (C. 3 § 5; C. 4; C. 9 § 3)。財力欠乏 *achrematia* は政治的にも徴力 *asthena* であり、その徴力は相互交通の不安、就中海上交通の不安にありと考へるなら

ば、海上制覇が物資補給の先決問題であり、國力充實の第一歩であるといばなければならない。ここにアテナイ的な Machpolitik が是認されなければならないのである。

以上二二一章までを通觀すれば、そこにツクエディスの歴史觀が明瞭になるとともに、それはやがてペロポネソス戰役に導かるゝ核心が臍氣に浮み出て居り、しかもその根柢に一貫した主張の存することが察知されるのである。即ち經濟力と政治力とは相伴つて消長するといふこと、又近代に接近するに従つてそれらの勢力の増大してゆくといふことである。しかしながらそれは進歩の一路をたどるものではなく、それらに自ら時期の區別さるるもの存するを認めたのであつて、茲にトロイア戰役を一段落としてゐるやうである。時代の區分さるべきことは考へてはゐるが、その後の發展についても、經濟力と政治力との相關から解説するのであつて、歴史の動く姿については、確固たるものを觀じてゐたのである。

九

第二章はトロイア戰役後のギリシアの動向を考察する。

ギリシア民族の移動性の殘存と、對外戰爭の間に起れる、國內的紛争とから説き起し(參照一)、その動亂の後に、移動種族の定着したことと更に植民の隆盛となつたことを記述してゐる(參照二)。

移住性の殘存を説くことは、極めて短いにもかゝらず、歴史の動きが千篇一律に動かざる現實に留意したものであつて、彼の細心なる用意のほどがみられる。また國內の紛争については、既に第二章二節に觸れたところであるが、政治力の葛藤が、次第に露骨になり歴史の表面にあらはれることを示すものであつて、それが定着的となればなるほど、古の如く簡單に移住によつて解決しえない激烈さを豫想せしめる。

また民族の定著と同時に、更に幾多の問題が含まれてくる。定着しうるために交通の開かるべきこと、人口の

増大を緩和すべき植民の問題、發展の基礎としての國力の強化即ち國內における政治力と海外にのびるべき海軍力の問題、これらが次に解明される。

第一に國內の問題としては僭主政治の出現をといてゐる(C. 13 § 1)。しかし僭主の利己的な性格が、ギリシア民族全體としての發展に寄與すること少きを論じてゐる(C. 17)。

ギリシアにおいては僭主時代は特に注目されるべきなものであるが、ツクムディデスはその意義を重視してゐない。唯、ギリシアに海軍の隆盛にあつたことを併記してゐるにすぎない(C. 13 § 16)。恐らく僭主を非道なものと考へた當代の通念によるものであらう。

結局、ギリシア人の富の増大と海上發展との關係深きことに注意を集中してゐるかと思はれる(C. 13 § 1, 5-6; C. 15 § 1)。

海上の發展についても、その接觸面における紛争はあつたけれども(C. 13 § 6; C. 14 § 3; C. 16)トロイア戦争のやうな民族的團結による戦争はなく、それ

は僭主が専ら國內的な勢力維持に努めたためであると考えた(C. 15 § 2; C. 17)。

だからスパルタによる僭主打倒と、時を同じうして起つたペルシア戦役とは、少くとも彼のギリシア史觀においては密接に結びあふのである。

そしてスパルタが内陸的に久しく定着したことと、特殊政體を持続することによつて、一方の覇者であるのに對し(C. 13 § 1)、海軍力によるアテナイの勢力があり(C. 14 § 3; C. 15 § 1)後者が富の地盤の上に立つ強大なものたることを考へる(C. 15 § 1)。その兩巨頭を中心にギリシアが二分し(C. 13 § 3)、各々の獨自のあり方において競争し、それが丁度双方の實力の最高潮にあることに説き至つたのである(C. 19)。

十

ギリシアにおける二大勢力の對峙を説くにあつて、アテナイの勢力が海上發展にあることを説いてゐることは、從來解説し來つたやうに、ツクムディデスにとつて

は極めて至當なものと領得されるところである。

けれどもスパルタについては、その強力なる原因を、古くから好き制度をもつたこと *eunomhe* と、僭主をもたなかつたこと *atimaneitos* とに歸してゐることは (C. 18 S. 1) 大に注目されるべきである。

僭主肆虐が讚美された時代において、先きに説いたやうに、僭主の歴史的意義についてツクユディデスが十分な認識をもたなかつたことは敢て異とすべきではない。僭主は反つて私利を計るものと觀察されてゐた (C. 17)。だから、スパルタに僭主政治がなかつたことを以て、その國家の強力な原因とみたといふことは、むしろ當然といふべきであらう。

之に對して好い制度をもつたことを、スパルタの強大になつた一つの理由としてゐることは、遙かに積極的なものがある。それまでツクユディデスの論じて來たところは、經濟力を中心として政治力の伸張するといふ點にあつた。今や消極的には僭主の出なかつたことをとき、積極的に善法の力を以て、國家強大の理由としたこと

ツクユディデスの古代史に就いて

は、政治自體のあり方が政治力に影響することを主張するものといふべきであつて、此の點に、*homo politicus* としてのギリシア人の風貌をみる事が出来る。また政治思想のうちにも、政體論が大きく取り上げられ來る所以をもここに計量することが出来る。同時にまた歴史記述の上に、經濟と併行して、如何に強く政治といふものを考へたかといふことが思はれるのである。

此のことは後にペリクレスの言葉のうちにも、

「如何なる憲法によつて大をなしたかといふのがふさはしい」(II. C. 36 S. 4)

とか、或は

「アテナイ人は家のことと同時に國家のことに盡す。

家事に専念してもなほまた政治のことを考へてゐる。

國家のことを考へぬものは無害の者と考へないで無用の人と考へる。政治を創造する人は少いかも知れない

が、凡て正しく政治を判断する (II. C. 40 S. 2)

といふ有名な言葉に通ずるものであつて、政治といふことが、人々に如何ばかり強い關心事であつたかを物語る

のである。同時に歴史家としてのツクユディデスを特色づける一面であるといふべきである。

十一

なほ政治力といひ經濟力といひ、兎に角、力が人事を支配するといふことは、ツクユディデスの思想を左右した大きな點である。

二章四節、五章一節、八章三節、一〇章二節、一三章六節、就中九章一節、一五章二節、一八章一節などにみゆるところである。當時流行した強者の権利の思想に影響されたものといふべきであつて、後にもしばしば述べられてゐる。

これは一面ギリシア人の政治生活の實相を深く體認した結果であるとも考へられる。之と關聯して、道義よりもむしろ強壓に對する恐怖 *phobos* が、人の行爲を支配するといふ思想がある (C. 9. 33; C. 24. 30)。かゝる思想は、權力を重視する必然の結果であり、東洋的な道義心と根本的に區別さるところである。然り、それは

どギリシア的人間觀が横溢してゐるのである。

かくツクユディデスの歴史がギリシア的人間味に溢れてゐるといふことは、彼が歴史を人間のものとして解釋した結果である。「人間であるといふことの故に」 *Krita to anthropion* (C. 22. 34) 將來起るべき類似の現象の参考たらしめんとして書いたと主張するとほりである。

かくの如く、歴史をほんたうに人間のものとして考へたといふことは、はつきりとその態度をもつて歴史を書いたといふことは、ツクユディデスの著しい特色である。人間の歴史と考へたればこそ、歴史に神が關與することを拒否しえたのである。勿論、歴史に非合理の面のあること *Thyhe* (I. C. 140 S. 1; II. C. 64 S. 1) を認めながらも、神の手が歴史に及ぶことを排除したればこそ、人間の世のあり方の眞實を語りえたのである (C. 21-22)。人間の世の眞實の在り方を知らんとしたればこそ、人間性のもつ弱さ、例へば權力をもつものが強壓をするとか、微弱なる者が恐怖によつて行動するとか、いふ觀方も生じたのである。

第二〇章から二二章に亘る歴史研究に對する細心な注意、噂とか傳説の俄かに信じうべからざること、或は古い事件に向つてより多くの驚異を感ずること、或は記憶の不正確や再現の不可能などに對する反省は、如何にも良心的な歴史家であつたことに多大の尊敬を拂はしむるものである。しかもそれは一面には學的良好の他に、作者が人間自身であることの自覺と、人間であるものものつ弱さに十分の反省を加へてゐたところから發するものである。

十二

以上のやうに、所謂古代史の部分を分柝してみると、勿論全體としてはペロポネソス戰役史に對する序説であることに間違ひはない。

けれども同時にそれは單なる序説でないことも亦認めなければならぬ。「古代の戰は小規模のものであつたことを示さんとする」やうな單純な意圖のものではない。さればとて、戰に直接關係のあることを掲げ來つたもの

でもなければ、簡單に前代の歴史の梗概を述べたといふのでは勿論ない。

先きにあげた

「一層古いことを詳細に知ることは、永い年月のために不可能であるが、可及的に廣い研究によつて、信するに足ると思はれる證據によつて」(C. 132)

といふ忠實な客觀主義を標榜して立つたのである。そして如何に忠實にその態度を堅持したかといふことは、二〇—二二章において、更に確かめられてゐるのである。

「古いところを自分はかくの如くに究めてゐる。その際の證據を一例に信賴することは困難であつた。何故なら、人々は昔の出來事をきく時は、それがたとひ自國のものとなつても調べないで、一樣にそれ／＼うけとるものだから」(C. 20 § 1)

「多くの人は、眞理の探求にはかく努力しないで、むしろ手近なものにふりむく」(C. 20 § 3)

此の意味において、所謂古代史の部分には、ペロポネソス戰役史を書く態度を標明した序説が含まれてゐる

といふことに誤りはない。

けれども古代史はそんな軽い内容ではないのみならず作者自身もそれを意圖してゐないのである。

「アテナイ人とペロポネソス人とは、エウボイアの陥落の後に締結された三十年の條約を破つて戦に入つたのだ」(C. 23 § 4)

「何故彼等がそれを破つたか。どういふ譯でかゝる戦争がギリシア人の間に起つたかといふことを、何人も探索しないやうにと、自分はその原因と行違ひとを第一に書いたのである」(C. 23 § 5)

「即ち、真相は、少くとも言葉にはあらはされてゐないが、アテナイ人が強力となりそれがラケダイモン人に恐怖を興へて、遂に戦に到らしめたのであると信ずる」(C. 23 § 6)

と書いてゐるやうに、ペロポネソス戦役は勢なのである。その勢の経過を理解しなければ、戦争に立ち到つた眞の事情はわからないのである。だから表面にあらはれてくる口實が真相を解明するものではなく、その口實の

背後にあり、戦の由來する歴史的地盤をなすもの究明から解剖しなければならぬのである。

換言すると、一個半個の政治家の個人的な意圖や、偶然の事情から大戦亂が起るのではなく、もつと大規模な勢力の競り合ひから來るのである。

それを知るためには畢竟ギリシア史の歴史的地盤を考へなければならぬことであり、更に大きくいへば、歴史の動きといふものの究明からしてかゝらなければならぬのである。

ギリシア全體が、二大陣營に立ち分れて戦ふといふことには、深い歴史事情がある。その葛藤は種族の移動、更に深くは經濟生活の機構の中に事情がひそんでゐる。それと形影伴ふ如き政治權力の強弱に緣由がある。政治的社會的な諸力の結成が、鬭争の因となるのであるが、それは大に物的諸力に左右される。けれども政治力の結成は單に物的諸力のみに依存するものでなく、政治機構そのものに由來することも頗る大きい。惹いては服裝とか、政體とかその他の慣習の差違となつてさへあらはれ

る。そして種族の文化程度といふものは必ず一様に進展するものではないし、その定着した土地の事情にもよるのであつて、さうした色々の差違が、力の衝突となつてあらはれるのは避け難い。しかも二大勢力が對立すれば、群小諸勢力は、その何れかに加擔しなければ自己保存さへも出来ない。

かうした歴史地盤を、ギリシア人の古代の史實について検討し來つたのである。又さうしなければ、ペロポネソス戦争の來由がほんたうに理解できないのである。

それは一面においてペロポネソス戦争の來由を歴史的に究明したことにもなるが、それと同時にギリシア史の性格、否、歴史そのものの性格をさへ究明したことにもなるのである。

だから、ツクユデイデスの古代史は、全部が彼の歴史觀であり、一面では彼の方法論であるといつても好い。従つて、之を全面的に方法論的序説といへば、さう呼ぶことも可能である。またペロポネソス戦役史の序説に

といへば序説であるといつても好い。けれども、それは單なる序説ではなくて、ペロポネソス戦役の來由を理解するためには、是非ともなくてはならない有機的構造をもつ序説である。のみならず、反つてこれを獨立せしめるならば、獨立した古代史ともなりうるものであり、又獨立した歴史論とも呼びうるものである。

若し人あつてツクユデイデスの全史を読む暇なしといふならば、この古代史の部分だけを讀んでも彼の歴史觀が理解されるのである。更に他の歴史家の書物を読む機會をもたない人が、古代の歴史觀を覗はんとするならば此の部分をやめば好い、極言するならば、凡そ歴史とはどんなものかを知りたい人は、心を籠めて此の部分を読すれば、大體に通じうるといつても好いであらう。

それほどの意味を、ツクユデイデスの古代史は具有してゐるのである。それほどの重要性を備へ、それほど緊密な聯繫を以てペロポネソス戦役の來由をのべたものである。